

総進図書

岡山栄一 氏

「平成 29 年度 千葉県高校入試結果と今後の入試動向」

# 千葉県高校入試 29 年度の概要と入試制度の方向性

(株) 総進図書 岡山 栄一

## 前期選抜、チャレンジ志向が依然続く！

現行の入試制度（前期選抜・後期選抜）になって7年目の入試であった。千葉県の入試制度は昨年度（28年度）にいわゆるマイナーチェンジがあり、前期選抜における選抜枠（全体募集に対して前期選抜において募集する割合）が、専門学科及び総合学科について上限を100%、つまり前期選抜で全ての人員を募集することが可能となった。今年度は該当する53校101学科のうち約85%の40校86学科が前期選抜の選抜枠を100%に設定した。これは、昨年度とほぼ同じで、大きな変化は見られなかった。また、「県立学校改革推進プラン・第2次及び第3次実施プログラム」により、木更津高校に新たに「理数科」が、佐倉西高校に「福祉コース」、英語科の募集停止に伴い匝瑳高校普通科に「国際コース」が設置された。

昨年度東京都内の私立高校の一般入試と重なった前期選抜は、今年度は、その影響も踏まえて、2月13日（月）、14日（火）に実施された。予定人員22,706人に対し、39,829人が志願し、志願倍率は1.75倍となった。昨年度と同じ志願倍率に見えるが、細かく計算すると約0.01ポイント上昇していることがわかる。また、実施日が東京都内私立入試の後ということもあり、昨年度より多くの受検予定者が欠席したという事態も見られた。実際の受検者数と合格者数から計算される実質倍率も1.77倍で、昨年度に比較して0.01ポイント上昇した。例年高い倍率を示す普通科だが、2.50倍を越す異常な倍率の学校・学科は昨年度と比べ減少し、11校13学科（昨年度15校17学科）に留まった。県立千葉、県立船橋、千葉東、佐倉といった上位・人気校は常に3倍近い倍率を記録するが、今年度は昨年度の高い倍率を嫌い志願者が例年のように伸びない学校・学科が中堅校から上位校に増えた為と思われる。一方、志願倍率が1.00倍に満たない学校・学科は、昨年度より増加し、22校30学科（昨年度14校23学科）となった。定員に満たない学科は、ほぼ専門学科・総合学科を中心とするが、鎌ヶ谷西高校、市原高校といった普通科でも見られた。学科別では工業系の学科及び農業系の学科が苦戦を強いられ、京葉工業、千葉工業、市川工業といった都心部の高校でも定員を充足できない学科があった。普通科志向は依然強く、普通科のみの志願倍率は1.92倍とほぼ前年度と同じであった。

後期選抜は3月1日に実施され、予定人員11,574人に対し、16,619人が志願し、1.44倍で昨年度より0.02ポイント上昇した。実質倍率も0.02ポイント上昇し、1.45倍となった。これは、募集定員の減少（後期募集人員59人減）、志願・希望変更時でのとりやめの大幅な減少（昨年度は40人とりやめたが今年度は4人）、欠席者の大幅な減少（昨年度50人）が原因と考えられ、粘り強く第一志望校へ取り組む姿勢が見られたと言える。また、志願・希望変更を行った受検者も昨年度より増え、約430人の受検者が志願先の高校を変更した。特に、千葉市を中心とした第1学区、船橋・松戸を中心とした第2学区、例年あまり動かない東総地区の第5学区に大きな変動が見られた。2.00倍を超えた学校・学科は前年度より増え（7校7学科→10校14学科）、上位校の倍率に軒並み上昇傾向が見られた。県立千葉、県立船橋は言うまでもないが、薬園台、小金、市立千葉、市立稲毛といった上位校が昨年度を上回る倍率となった。中堅校では、松戸国際がさらに倍率を

前期予定人員	22,706人（46人減）
志願者数	39,829人（114人増）
志願倍率	1.75倍（1.75倍）
欠席者数	206人（137人）
受検者数	39,623人（45人増）
合格者数	22,346人（135人減）
実質倍率	1.77倍（1.76倍）
後期募集人員	11,574人（59人減）
志願者数（2/23）	16,623人（20人増）
志願者確定数	16,619人（56人増）
志願倍率	1.44倍（1.42倍）
欠席者数	11人（39人減）
受検者数	16,608人（95人増）
合格者数	11,467人（97人減）
実質倍率	1.45倍（1.43倍）

上げ、昨年度に増して厳しい入試となった。普通科に関しては、前年度と同程度あるいはそれ以上の厳しい状況であったと言える。選抜枠の拡大に伴い、53校 101学科の専門学科及び総合学科のうち、後期募集を実施したのは、25校 32学科とほぼ3割であった。学科別では、国際教養科が非常に厳しく、特に松戸国際は2.92倍と県内一の高倍率となった。理数科は、都心部と地方との差が大きく、今年度新設された木更津高校の理数科は、転科合格でようやく定員を満たす状況であった。

## 各学区の概況（2学区激戦、3学区は緩やかな入試に！）

### 〔1学区—千葉市〕

前期選抜は、依然高い倍率で推移し、今年度も昨年度より0.02ポイント上昇の1.91倍を記録した。上位校の県立千葉（3.29倍）、千葉東（2.86倍）、市立千葉（2.85倍）は3倍近い激戦となっている。特に市立千葉の普通科は大幅に志願者数を増やした。逆に、同じ市立の稲毛は昨年の高い倍率の反動から志願者を減らし、2.26倍となった。人気が高い幕張総合は、常に1000人を超す受検者を確保し、2.50倍前後の安定した入試が続いている。中堅校では、磯辺高校の上昇傾向が顕著で、特に今年度は545人が受検し、2.82

学区（地域）	前期選抜	後期選抜
1学区(千葉市)	1.91倍(1.89)	1.57倍(1.54)
2学区(船橋・松戸他)	1.95倍(1.94)	1.56倍(1.51)
3学区(柏・流山他)	1.73倍(1.78)	1.38倍(1.46)
4学区(佐倉・四街道他)	1.71倍(1.67)	1.40倍(1.43)
5学区(佐原・銚子他)	1.34倍(1.35)	1.12倍(1.05)
6学区(成東・東金他)	1.45倍(1.44)	1.15倍(1.26)
7学区(茂原・いすみ他)	1.25倍(1.27)	1.06倍(1.05)
8学区(安房・館山他)	1.22倍(1.22)	0.85倍(0.86)
9学区(木更津・市原他)	1.57倍(1.66)	1.21倍(1.28)

倍の非常に高い倍率となった。千葉南、千葉北高校には、緩やかな志願者数の減少が見られ、今年度は2.00倍を切る比較的緩やかな入試状況となった。千葉西高校は、昨年度の高倍率の反動から志願者を大幅に減らし、いわゆる隔年現象が見られた。生浜は、昨年度落ち込んだ志願者数が回復し、下位校では厳しい2.35倍を記録した。千城台、柏井、土気、犢橋の各高校は、緩やかな入試状況が続いている。専門学科では、市立千葉の理数は昨年度より大幅に上昇し、逆に市立稲毛の国際教養は志願者を大きく減少させた。幕張総合の看護科は2.15倍と人気を維持したが、京葉工業、千葉工業といった工業系の学科は苦戦を強いられた。

後期選抜では、昨年度募集のなかった専門学科のうち、京葉工業の電子工業、千葉工業の情報技術が、前期選抜で定員を満たすことができず、募集を実施した。この学区は後期選抜の倍率も高く、昨年度を0.03ポイント上回る1.57倍を記録した。前期選抜と傾向はほぼ同じで、上位校は2.00倍前後で厳しい入試が続いている。前期同様、磯辺の人気が高く、昨年の1.84倍をさらに上回る1.91倍となった。専門学科では、市立千葉の理数科が2.80倍を記録、市立稲毛の国際教養も2.50倍と非常に厳しい入試となった。

表：前期選抜で志願倍率が高かった学校・学科

船橋	普通	3.40倍
千葉	普通	3.29倍
船橋	理数	3.25倍
小金	総合学科	2.95倍
松戸国際	普通	2.87倍
千葉東	普通	2.86倍
市立千葉	普通	2.85倍
磯辺	普通	2.84倍
佐倉	普通	2.78倍
薬園台	普通	2.68倍
市立千葉	理数	2.67倍
幕張総合	普通	2.59倍
東葛飾	普通	2.54倍
松戸	普通	2.48倍
船橋芝山	普通	2.44倍

### 〔2学区—船橋・市川・松戸他〕

船橋地区のトップ校県立船橋の勢い（3.28倍→3.38倍→3.40倍）が止まらない。今年度も前期選抜の志願倍率は3.40倍で県内一の倍率を記録した。高くかつ中身の濃い進学指導を理由に、船橋近隣だけではなく東葛地区からの県立船橋志向が顕著となっている。2番手の薬園台は、昨年度志願者を大幅に減らしたが、今年度はやや回復し2.68倍となった（このクラスでは少し物足りない数字であるが）。隔年現象なのか、八千代高校は、大幅に志願者を減らし、2.26倍に留まる。同じように昨年度の高い倍率を嫌がり、倍率を大幅に下げた高校が市川地区にもあり、国府台、市川東は、それぞれ2.09倍、2.30倍に下降した。国分高校も志願者数は若干下降気味だが、

なんとか2.42倍を確保した。松戸地区では、小金、松戸国際の人气が今まで以上に高くなってきている。特に小金は以前の生徒の自主性を重視する方針から、その伝統を継承しつつ進学指導にも力を入れてきており、進学実績等の向上も見られ、その点が評価されていると思われる。今後の進学指導の実績如何では、薬園台に追いつき追い越す事態になれば、薬園台から小金への志願変更の流れが生じる可能性もある。松戸国際は、以前は圧倒的に女子が多かったが、男子の志願者が増加傾向にあり、その点を考えれば進学実績も今後伸びていくと思われる。その他では、津田沼、船橋芝山、船橋古和釜の志願者数に増加傾向が見られる。また、受検対象を今までの市内在住から県立高校と同じ学区に変更した市立船橋の普通科も大幅に志願者を増やし、今までにない高い倍率（前期選抜2.31倍、後期選抜1.90倍）を示した。さらに、定員40名減及び志願者数の大幅な増加により、県立松戸が、例年になく厳しい入試となった。

後期選抜では、志願倍率の上昇が目立ったのは、県立船橋（2.17倍→2.35倍）、薬園台（1.97倍→2.13倍）、県立松戸（1.13→1.56倍）、小金（1.88倍→2.11倍）及び松戸国際（1.82倍→2.05倍）、逆に下降したのは、八千代（1.89倍→1.63倍）、国府台（1.98倍→1.59倍）、国分（1.99倍→1.68倍）と、ほぼ前期選抜の傾向を反映した。専門学科では、松戸国際の国際教養科が2.92倍を記録し、後期選抜において最も高い倍率となった。

### 【3学区—柏・流山・野田・我孫子・鎌ヶ谷】

東葛飾の志願者数には確実に減少傾向が見られる。今年度の前期選抜の志願者数は500名を切り、487名（志願倍率2.54倍）に留まった。先に述べたように、従来の東葛ブランドは絶対的なものではなく、近年、県立船橋に志願者が流れるといった傾向が見られ、また、志願者の中にはチャレンジ受験も多く見られ、レベルの維持に不安が感じられる。28年度の併設中学校開校に伴い、どのように変化していくか注目される。3学区2番手の県立柏は、志願者数をやや減らし、このレベルでは低調な志願状況が続いており、こちらもレベルの低下が懸念される。完全に小金に逆転されたと言っても良いであろう。鎌ヶ谷、柏南の人気校は、やや志願倍率を下降させたものの、相変わらずの人气で、この2つの高校については、入学後の学習指導や進路指導に注目が集中している。地域の発展が著しいつくばエクスプレス沿いの高校については、柏の葉は男子の志願者数を伸ばし、2.33倍と厳しい入試となった。また、昨年度大幅に志願者数を減らした流山お

表：後期選抜で志願倍率が高かった学校・学科

松戸国際	国際教養	2.92倍
市立千葉	理数	2.80倍
市立習志野	商業	2.63倍
市立稲毛	国際教養	2.50倍
千葉	普通	2.38倍
船橋	普通	2.35倍
佐倉	普通	2.21倍
船橋	理数	2.19倍
薬園台	普通	2.13倍
小金	総合学科	2.11倍
市立稲毛	普通	2.06倍
松戸国際	普通	2.05倍
市立千葉	普通	2.03倍
東葛飾	普通	1.95倍
磯辺	普通	1.91倍

たかの森は、一昨年的人气を回復し1.87倍から2.33倍まで上昇した。一方、昨年2.55倍と多くの不合格者を出した柏中央は、約100名志願者を減らし、2.13倍と緩やかな入試となった。この学区には、全体として下降傾向が見られる。

後期選抜は、上位校が軒並み倍率を下降させている。東葛飾（2.09倍→1.95倍）、県立柏（1.52倍→1.49倍）、柏南（1.99倍→1.81倍）。柏中央も1.97倍から1.51倍と大きく下降した。人気校で倍率を上昇させたのは、柏の葉と流山おたかの森だけで、この学区の後期選抜は昨年度と比較して非常に緩やかな入試（1.46倍→1.38倍）となった。

### 【4学区—成田・印旛・佐倉・四街道他】

トップ校の佐倉は、前年より志願者をさらに増やし、特に女子の志願者が増加し2.78倍まで上昇した。理数科はやや志願者を減らし1.73倍に留まった。成田国際は、27年度からのグローバルスクールの設置を背景に、普通科及び国際科ともに人气が高く、普通科はこの3年間比較的安定した志願状況が続いている。国際科は大幅に志願者を伸ばし、1.54倍から2.10倍まで上昇した。成田北は40名の定員増で志願者数の大幅増加を見込んだ

が、思うように志願者数が伸びず、定員増がそのまま倍率に影響した（1.75倍→1.43倍）。佐倉西、四街道の各普通科は、昨年度より志願者数を伸ばし、2.00倍を超える厳しい入試となった。2.00倍を超えていた印旛明誠は、人気が一と段落し、ここ3年志願者180人前後で推移している。専門学科では、佐倉東の調理国際が1.93倍と人気が高かった。

#### [5学区—銚子・香取・旭他]

トップ校の佐原の志願者数は昨年度まで減少傾向にあったが、今年度はやや回復し、前期選抜の倍率は1.76倍となった。後期選抜も1.29倍まで回復した。理数科も二次募集はまぬかれたが、前期選抜の志願倍率は1.18倍で苦戦を強いられている。また伝統校の匝瑳高校は、今年度も志願者数が伸びず、前期選抜は昨年度並みで、後期選抜の理数科では普通科からの転科合格で二次募集をなんとかまぬかれた。佐原白楊は、昨年度まで志願者数を伸ばしていたが、今年度は女子の志願者数が減り、前期選抜2.01倍、後期選抜1.24倍に留まった。また、小見川の前期はやや厳しいものとなった。

#### [6学区—山武・東金他]

東金・山武地域では、全体として比較的緩やかな状況の中、トップ校の成東の普通科は安定した志願者数を確保し、今年度もやや倍率を下げたが前期選抜1.94倍を記録した。学区2番手の東金の普通科は、昨年度志願者を減らしたが、今年度は女子の志願者が増加し、一昨年度の水準（1.91倍）まで回復した。その他、大網の普通科はやや志願者数を伸ばすが、九十九里は昨年度よりさらに志願者数を減らした。専門学科では、昨年度軒並み志願者数を増やした大網高校の各科は生産技術のみ昨年度を上回った。

#### [7学区—茂原・いすみ他]

7学区トップの長生普通科に緩やかであるが下降傾向が見られ、今年度も前期選抜2.02倍、後期選抜1.50倍と昨年度に引き続き志願倍率は下降した。理数科は志願者数ではやや持ち直したが、後期選抜は不合格者1人と非常に緩やかな入試が続いている。中堅校の茂原は前期選抜でやや志願倍率を下降させたが、比較的安定した入試が続いている。大多喜は志願者数をやや増加させ、一昨年度の水準に近づいた。茂原樟陽は、昨年度同様、農業系の学科は安定しているが、工業系の各学科が苦戦を強いられている。統合校の大原（従来の大原・岬・勝浦若潮）は志願者数が伸びず、前期選抜0.64倍、後期選抜でも定員を確保できず、大幅な二次募集（68名）を昨年引き続き実施した。

#### [8学区—鴨川・館山他]

トップ校の安房は、志願者数を前年より約40名増やし、前期選抜1.97倍まで上昇、後期選抜でも1.33倍まで回復した。長狭高校は志願者数を減らし、前年度なみの志願状況（前期1.79倍、後期1.16倍）を確保できず、二次募集を実施した。館山総合の各学科は、依然緩やかな入試が続いており、今年度も大幅な二次募集を実施した。

#### [9学区—木更津・君津・市原他]

理数科の新設に伴い定員を40人減らした木更津の普通科は、志願者数も大幅に減少させた為、前期選抜2.05倍、後期選抜1.52倍と、昨年度を下回る結果となった。新設された理数科は、思うように志願者が伸びず、後期選抜では大幅な転科合格を出した。君津高校は、やや持ち直し前期選抜2.13倍、後期選抜1.56倍まで上昇した。京葉高校は、昨年度の高倍率を嫌い、大幅に志願者を減少させ、前期選抜は昨年度の2.31倍から1.83倍まで大きく下降した。前年度高倍率であった袖ヶ浦は、今年度も前期（2.25倍）・後期（1.79倍）とも厳しい入試となった。専門学科では、袖ヶ浦の情報コミュニケーションが昨年度に引き続き高い倍率（前



期選抜 1.90 倍) を記録した。

## 入試制度の方向性は？

千葉県教育委員会は、現在の入試制度（前期及び後期選抜）になって 3 年が終了した 24 年度末に「現行の入試制度」についてアンケートを実施した。このアンケートは、この制度になって 3 年が終了し、その検証のために行われたものである。対象は、公立中学校長、公立高等学校長、県内私立高等学校長、中 3 生徒及び保護者、高 1 生徒及び保護者である。その結果を踏まえて、25 年度に「千葉県公立高等学校入学者選抜方法等改善協議会」を計 4 回開催し、今後の入試制度について検討を重ねた。その中では、「入試の一本化」という声が強有感じられ、また「それを実施するためには、最低 2 年、最善は 3 年が周知徹底に必要である」という意見が多くだされた。しかしながら、平成 26 年 4 月 16 日に開催された千葉県教育委員会会議において、次のことが承認され、27 年度入試及び 28 年度入試から実施されることとなった。

- ① 専門学科及び総合学科の前期選抜枠を現行の全体募集定員の 50%～80%を、50%～100%に変更する。(28 年度入試より)
- ② 「志願理由書」について任意の提出(高校側が決定)に改める。(27 年度入試より)
- ③ 「入学確約書」について、出身中学校長の公印を削除する。(27 年度入試より)

以上の経緯で、今年度(28 年度)から、普通科については現行のまま、専門学科及び総合学科については前期選抜で全体募集定員の 100%を募集できることとなった。右の表は、千葉県の入試制度がどのように変わったかを入試年度で表したものである。この変化の推移を考えると、今年度から始まった入試制度が 1 年間でまた変更されるとは考えにくく、やはり最低 3 年は続くと思われる。実際に 25 年度において年 4 回開催された改善協議会は、この変更点が発表された後の 26 年度及び 27 年度においては、年 2 回しか開催されておらずほとんどさらなる進展はない。ここまでは昨年**の原稿のままである。**

さて、今年度(28 年度)はどのような展開があったのかをお知らせしたい。千葉県教育委員会は、入学者選抜のさらなる改善に向けて、平成 26 年度末及び 27 年度末に「受検生の動向調査」を実施した。これは、前期選抜で受検した生徒が、その後の後期選抜にどのように臨んでいったのか(例えば、前期・後期ともに同じ学校を受検、前期と後期では異なった学校を受検とその理由等)を直近の受検生を対象に実施されたものである。その分析及び検討の為、今年度の「千葉県公立高等学校入学者選抜方法等改善協議会(いわゆる入試改善協)」は、第 1 回平成 28 年 7 月 28 日、第 2 回平成 28 年 11 月 21 日に、計 2 回実施された。先の平成 26 年度・27 年度に引き続き、年 2 回の開催であった。次に、第 1 回の入試改善協で出された意見等を簡単に示したい。

○前期選抜、後期選抜の受検において、「前期・後期で異なる学校・学科を受検する予定だった者」の割合が増えている。また、「前期で専門学科、後期で普通科を受検した者」の割合が増えている。

○このデータでは、3 年生あるいは保護者が複数回の入試を求めている根拠にはならない。

平成 10 年度	「推薦による入学者選抜」(校長推薦) 「学力検査等による入学者選抜」
平成 11 年度	推薦枠 普通科 - 5%~40% 専門学科 - 5%~50%
平成 12 年度	
平成 13 年度	
平成 14 年度	↓
平成 15 年度	「特色ある入学者選抜」(自己推薦) 「学力検査等による入学者選抜」
平成 16 年度	選抜枠 普通科 - 10%~50% 専門学科 - 10%~50%
平成 17 年度	
平成 18 年度	
平成 19 年度	
平成 20 年度	
平成 21 年度	
平成 22 年度	↓
平成 23 年度	「前期選抜」(自己推薦)に改める 「後期選抜」に改める
平成 24 年度	選抜枠 普通科 - 30%~60% 専門学科 - 50%~80%
平成 25 年度	
平成 26 年度	
平成 27 年度	
平成 28 年度	専門・総合学科の選抜枠拡大(100%)
平成 29 年度	選抜枠 普通科 - 30%~60% 専門学科 - 50%~100%
平成 30 年度	
平成 31 年度	

○中学校長会でも調査したが、やはり一本化が望ましい。2回入試があることで、2月に授業ができず、子供たちの学力等を考えるとデメリットになる。

○高校も3学期の教育課程に支障が出ているという意見が多いので、もっと何かいい方法を考えていく必要がある。

○子供たちにとって2回チャレンジできるというのは、確かにいいことだと直感的に感じているのはわかるが、入る人数が決まっている中で、1回の入試であれば本来入れた生徒が、2回受検したことによって希望と違う学校を選んでしまうこともある。それはやはりデメリットではないか。やはり今年度中に方向性を示して、何年後に一本化していくということも話し合う必要がある。

やはり、中学校・高校側からは圧倒的に「一本化」を望む意見が出された。しかしながら、入試改善協が年2回の開催ではさらなる進展はない、毎年同じ意見の繰り返しの感が否めなかった。結論的に言えば「ほとんど進展していない」というのが現状かと思う。但し、第2回の会で、「入試改善協の開催を多くしたほうが良い」という意見もあり、次年度に向けて県教委側がどのように今後進めていくのかは注視しておくべきである。

昨年度も述べたが、今のところ、いわゆる「入試の一本化」ということは現実味を帯びていない話である。

